

## 〈地域調査報告〉

## 花火大会のまち・大曲

岩動志乃夫

東北学院大学教養学部地域構想学科

## I. はじめに

全国各地で地域おこし、まちおこしに取り組む事例が増えている（関・足利：2007；関・遠山：2007）。森林資源や自然環境を産業化した事例や食文化、人材育成にいたるまでその内容は様々である。本稿では全国的知名度を誇る大会に成長した「大曲の花火大会」を開催している秋田県大仙市の花火製造企業がどのような役割を担っているのかを明らかにする。そこで2010年9月8日から11日にかけて本学地域構想学科で著者の3年次演習を受講する9名が地域調査を実施した<sup>1)</sup>。大仙市では毎年8月の最終土曜日に市内の雄物川河川敷を会場に花火大会が開催される。一晩に花火見物に訪れる観光客は、およそ70万人前後とされ、同市の人口89290人<sup>2)</sup>の約8倍もの集客力を誇る今や大イベントに成長している。東北地方の小都市においてわずか1日のみで、これだけの規模の集客力を有する定期的イベントの開催例は大仙市を除いて他に見あたらない。イベントの開催が地域づくりにどのような影響を与え、その成長の中心的役割を担ってきた花火製造企業がどのような特性を有しているのかを探ってみたい。

方法は大仙市役所にて同市の人口動態、産業構成、交通や観光に関する概要と中心市街地活性化計画についての現状や展望などの説明を受けた。次に大曲商工会議所で主に「花火大会」の概要や運営についての聞き取りを実施した。さらに花火大会を開催する際に中心的役割を果たしている花火製造企業5社への聞き取りを実施した。各企業の工場で各工程の作業景観を見学し、打ち上げ花火が完成するまでの工程等詳細な説明を受けた。

## II. 大仙市の立地環境と産業特性

## (1) 立地と産業

大仙市は2005年3月22日に大曲市と神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町からなる仙北郡の7町村が合併し誕生した（図1）。地名の由来は「大曲市」と「仙北郡」のそれぞれの頭文字である「大」と「仙」を合わせたものである。旧大曲市の人口は2005年時点で38,794人、大仙市となった現在は88,605人となっている。本市は、秋田県の内陸南部に位置し、古くから県南の交通の要衝であった。現在では秋田自動車道、秋田新幹線の開通により、アクセス性、利便性共に向上し、観光客も増加する傾向にある。隣接市町村は秋田市、由利本荘市、横手市、仙北市、仙北郡美郷町、岩手県和賀郡西和賀町であり、大



図1 秋田県大仙市

仙市の総面積は866.7km<sup>2</sup>で、東西約44km<sup>2</sup>、南北約40km<sup>2</sup>である。秋田県では5番目の面積を有する。

市内の土地利用は、2009年において、山林30.4%、田畑24.5%、宅地2.9%、その他42.2%と山林・田畑が50%を超えることから、自然豊かな田園都市の特徴を持っているといえる。東に奥羽山脈、西に出羽丘陵、その間を流れる雄物川とその支流である玉川に沿った県内有数の穀倉地帯で、農村地帯の原風景として四季折々に美しい表情を見せる。気候は内陸型を示し、2008年では年間平均気温が11.8℃、年間降水量が1,251mm、積雪量は最深地で93cmとなっている。市全域が豪雪地帯に属しており、冬季においては日本海沿岸地区と比較すると気温が低く、夏季においては比較的高温多湿である。

大曲地区の歴史をたどると、中世の頃に大曲村が成立しており、交通の要衝となっていた。近世には宿場町としての機能も整備され、物資と人の交流も盛んとなり、次第に盆地内有数の商業地へと成長する。その後、1891年に町制施行により大曲町となった。1904年には国鉄の大曲駅が竣工され、その翌年からは奥羽本線が当地方を走り、さらに1922年には生保内線も開通するなど商業地としての条件はさらに充実する。1947年に発生した大洪水は、戦後の混乱と相まって大きな被害を出した。1954年には市制施行により大曲市となり、2005年の合併を経て現在に至った。

今や全国的な規模で著名となった大曲全国花火競技大会は第1回が1910年8月26日に諏訪神社の祭典の奉納花火として「奥羽六県煙火共進会」という名称のもと開催されている。その後第二次世界大戦などにより中止もあったものの、大会は2010年で100年目を迎え、今日まで盛大に続いている。また他の地域でもイベントが多く行われており、神岡地区では「全県500歳野球大会」、西仙北地区では「刈和野の大綱引き」、中仙地区では「ドンパン祭り」、「全国ジャンボうさぎフェスティバル」、協和地区では「七夕祭り」、南外地区では「ふるさとなんがい夏祭り」、仙北地区では「仙北町

冬まつり」、太田地区では「秋田おはら節全国大会」などが行われている。

## (2) 大曲駅前区画整理事業

1989年度から2015年度にかけて大曲駅前地区は区画整理が実施されている。この地区は大仙市内の中心市街地で商店街や住宅地域より構成されているが、近年道路、公園等の公共施設の設備が遅れ、土地利用の効率が悪くなっている。そこで新しい街づくりを機会に公共施設の整備改善を行い交通の円滑化、歩行者の安全確保に努めながら商店街の形成、住宅利用の増進と地域全体の活性化を図ることが目的となっている。

この区画整理は病院を核とした中心市街地活性化の事例として、全国でも珍しいケースである。仙北組合総合病院に関しては1934年に病院事業が開始され、1965年には現在の場所に竣工された。以来、管理棟、南棟、東棟の増築を行っている。病床数は一般が560床、他に結核が4棟、感染症が4棟である。診療科目は内科、循環器科、消化器科、小児科、外科、呼吸器外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科、歯科の合計17科であり、大仙地区の総合病院として現在に至っている。しかし施設の老朽化が著しく、最新医療機器の導入も難しいのが現状である。さらに閉店したジョイフルシティ大曲の未利用地活用が問題とされていた。そこで2010年に「大曲通町地区市街地再開発準備組合」が発足し、2015年度までにジョイフルシティ大曲跡地に施設の移転改築事業が実施されることになった。対象地はジョイフルシティ跡地の「北街区」、現在病院の敷地である「南街区」である。北街区に9階建ての病院棟とバスターミナル、商業施設、事務所が入る3階建ての複合棟の建設が、南街区には高齢者施設が入る福祉棟、駐車場棟が建設される予定である。

### Ⅲ. 伝統ある大曲の花火大会

大曲の花火は、もともと地元の農家や地主らの道楽として親しまれ、明治末期の1910年に諏訪神社祭典の奉納花火の余興として「奥羽六県煙火共進会」という名のもとに開催されたのが始まりである<sup>3)</sup>。地域の余興としてスタートした大曲の花火であるが、第4回大会（1915年）に「全国花火競技大会」へと名称を変更し、全国規模の花火競技大会へ成長するきっかけとなった。この大会には東北各地をはじめ、北海道、遠くは愛知県、滋賀県、九州地方などからも打ち上げ花火が出品され、初めて栈敷席も設置されたという（表1）。

その後第二次世界大戦中、約10年間中止されていた花火競技大会は1946年に復活したが、戦後の食糧難による資金の問題から、大会の開催について市民の間で賛否両論の意見が交わされたという。第31回大会（1957年）から大会主催が大曲市から大曲商工会（現・大曲商工会議所）へ変わった。第37回大会（1963年）の通商産業大臣賞（現・経済産業大臣賞）創設や、全国初で創造花火が正式に競技種目に加わったことにより、観客数は増加し、第38回大会（1968年）には10万人に上った。

第52回大会（1978年）に競技種目として加わった昼花火とは日中に打ち上がる花火の総称で、以前は国内の有名花火大会で見られたが、競技として残っているのは大曲だけである。昼花火には貴重な製造技術が多くあることから、競技の存続が国内の昼花火の歴史や技術の伝承に貢献しているといえる。この年の夏に農業事情視察で訪独していた旧大曲市長の最上氏は、ドイツの旧ボン市長に表敬訪問し、大曲市の花火をPRした。日独の市長同士の会談により、大曲の花火は1979年の6月にボン市で行われた連邦庭園大会にて「日独親善大曲の花火」という名称で打ち上げられた。これを機に、1983年にはデュッセルドルフ市で、1987年にはベルリン市で大曲の花火が打ち上げられ、大曲の花火は海外でも広く知られていくことになった。

第60回大会（1986年）では花火以外にレーザー光線や音楽を使った「ショー」としての演出が始まり、第70回大会（1996年）からNHKBSハイビジョンで競技大会の様子が放映されたことで、大曲の全国花火競技大会は更なる飛躍を見せた。また同年には科学技術庁長官賞（現・文部科学大臣奨励賞）が夜花火に創設された。第74回大会（2000年）には、花火師の技術や地位向上を図るため、内閣総理大臣賞が土浦全国花火競技大会（茨城県）とともに新設され、大曲では夜花火の部の創造花火を中心に審査を行い、花火師に最優秀賞として贈られることとなった。このころから打上方法は、花火師の熟練した技術を要する打上方式から、コンピュータシステムを使用した安全な電気点火打上方式へと変わっていく。観客数も60万人を超えるようになった（図2）。

わが国の大規模花火大会は、大曲全国花火競技大会のほかに土浦全国花火競技大会（茨城県）、長岡まつり大花火大会（新潟県）がある。土浦全国花火競技大会は1925年から始まり、現在一晩で80万人近くまで入込客数を伸ばしている。実りの秋を祝い、農民の勤労を慰めるという趣旨から、商店街が農村に対して感謝の気持ちを込めて、秋に実施される。長岡まつり大花火大会は、1892年から神社の祭典として行われたのが起源である。打ち上げ花火の資金は、全て市民や企業のスポンサーから集められるもので、2日間に渡って行われていることから入込客数は90万人を超える。近年は大曲と土浦の花火大会の入込客数は、年を追うごとに増加傾向にあるのに対し、長岡の花火大会の入込客数は、2000年ころからほぼ同じ水準を保っている。

1910年に始まった大曲の花火は、2010年の第84回大会で100年目の節目を迎え、観客数は過去最高の80万人を超えた。今や競技の質は全国最高レベルであり、わが国の花火の製造および打ち上げ技術に大きな影響を与えている。

表1 全国花火競技大会歴史年表

年	月	日	開催回数	概要	入込客数(万人)	秋田県の動向
1910	8	26	1	諏訪神社祭典の奉納花火として、奥羽六県煙火共進会を開催		
1912				明治天皇崩御のため 中止		
1914				秋田仙北地震による震災ため 中止		秋田強首地震
1915	9	1	4	「全国煙火競技大会」と名称を変更 全国規模の大会をめざす		
1928	9	9	16	二日間にわたり、花火大会を開催 (主催：大曲煙火協会)		NHK秋田放送局 放送開始
1935				第2次世界大戦のため、終戦まで中止		
1946	8	22	20	花火大会が復活する		旧大曲市 発足 旧横手市・大館市 発足
1957			31	大会主催が大曲市から大曲市商工会(現・大曲商工会議所)に移る		秋田空港 開港
1963	8	25	37	通産大臣賞(現・経済産業大臣賞)が創設	7	
1964	8	23	38	全国初の「創造花火」が正式に競技種目に加わる	10	
1978			52	「昼花火」が競技種目に加わる		
1979	6	18	53	旧西ドイツ・ボン市で「日独親善大曲の花火」が上がる		
1983			57	デュッセルドルフ市で「日本ウィーク」の一環として大曲の花火が打ち上げられる	10	日本海中部地震
1986	8	25	60	大会提供花火でレーザーと音楽による演出を試みる		
1987			61	ベルリン市750年祭街頭フェスティバルのフィナーレを大曲の花火が飾る		
1992	8	24	66	大曲市で国際花火デザインシンポジウムが開催される	45	
1996			70	ハンガリー建国1100年祭での花火打ち上げ NHKBSハイビジョンでの放映開始 科学技術庁長官賞(現・文部科学大臣奨励賞)が夜花火競技に創設	50	
1997	8	24	71		57	秋田新幹線開業・ 秋田自動車道全通
2000	8	22	74	内閣総理大臣賞を新設 手動からコンピューターソフトを使用した打上になる	62	大仙市 発足 横手市・にかほ市 発足
2008	8	29	82	「大仙市花火伝統文化継承プロジェクト」発足	65	
2010	8	28	84	大曲花火100年の節目を迎える 観客は過去最高の80万人に	80	

資料：聞き取り調査および『大曲の花火』(2010)より作成

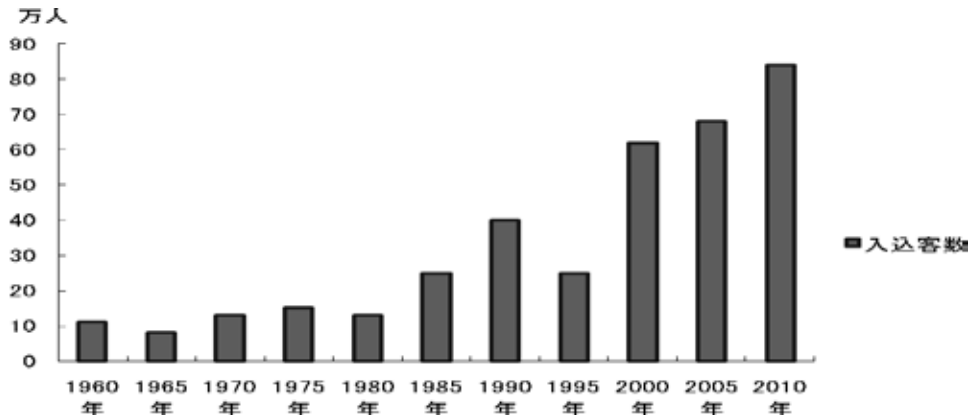


図2 大曲全国花火競技大会の入込客数の推移  
(資料：大曲商工会議所資料により作成)

#### IV. 打ち上げ花火の製造工程

##### (1) 花火の種類と性質

花火には主として手持ち花火などで知られるおもちゃ花火、ナイアガラなどで知られる仕掛け花火、そして打ち上げ花火の3種類があり、本稿では打ち上げ花火を対象とする。打ち上げ花火は「割物花火」と「ぼか物花火」に分類することができる。割物花火は一般的に花火大会で見られ、ぼか物花火は祭典や運動会の早朝に打ち上げる信号雷（音物花火）などがある。割物花火の大きさは、2.5号玉（直径7.5cm）から40号玉（直径120cm）まで存在し、一般的な花火大会では3号玉（直径9cm）から5号玉（直径15cm）が使用されている。割物花火は打ち上げた際に上空で花火玉の約1000倍に広がるため、3号玉（9cm）は直径約90mに広がる。ただし、10号玉以上になると重量の関係

から上空で広がる倍率は低くなる。花火玉1個あたりの価格は、割物、ぼか物花火とも3号玉が約4000円、4号玉が約7500円、5号玉が約1万円となっており、25号玉は1個約50万円程にもなる<sup>4)</sup>。当然、製造に時間と労力がかかる特殊花火の場合は同じ大きさの玉であっても相場の価格より高くなる。

##### (2) 花火製造工場と製造工程

花火製造工場は、火薬を大量に扱う場所であるため、たいへん厳しい管理下におかれており、それを遵守する内容が細かく規定されている。工場内でも工程ごとに防火壁に囲まれた加工所があり、各加工所で作業できる人員と扱える火薬量が法律で制限されている（写真1）。また、万が一の爆発事故発生に対する対応策として、工室ごとに一定の距離が保たれて設置されていることか



写真1 制限が表示されている工室の扉  
(資料：2010年9月 加藤悠人撮影)

ら、花火製造にはきわめて広大な土地が必要である。

### (3) 製造工程

最初は火薬の配合工程である。硝石・硫黄・炭の3つの火薬と色をつける薬品を混ぜ合わせる作業である。摩擦による発火の危険性が高いため、摩擦防止処置のされた専用の作業衣を身につけて手作業で少量ずつ行っている（写真2）。

次の工程は、造粒作業である。約1mm程に固めた泥に水分を施して粉末状の火薬を少量ずつ附着させる作業である。この次の乾燥工程とこれを繰り返し行うことで、火薬の粒を大きくし、打ち上げた際に奇麗な花火の色や形の元になる「星」を製造する（写真3）。

3番目の工程は造粒で製造した「星」を乾燥させる作業である。乾燥方法はいずれの企業も主に晩秋から翌年の春季にかけては灯油を燃料にして倉庫に温風を送り込む室内乾燥と春季から秋季にかけての天日干しとがあり、どちらも通常一回に半日以上時間を要して乾燥させる（写真4）。

4番目の工程は玉込め（仕込み）作業である。乾燥させた「星」と爆薬をまぶした籾殻・導火線を半球状の玉皮（紙の殻）に詰めていく作業である。籾殻は玉の中に来る隙間を埋め、打ち上げられた花火が上空で爆発する際にむらがでないよう均等に花火が奇麗に広がるための一助にもなるという。旧来より米作りが盛んな当地方では籾殻が豊富に活用できたことも、大曲に花火製造産業が定着した理由の一つである<sup>5)</sup>。これを重ね合わせて球状にし、花火の原形は完成する（写真5）。

次は花火の原形にクラフト紙を貼付する工程である。この工程は火薬の調合等の作業と異なり、糊付けする比較的単純作業であるため、女性労働者が担当する場合も多い。玉込めした花火の接合部分を隠し強度を高めるためにクラフト紙を貼りつけるのであるが、球形である花火の原形を接着剤の強弱を考慮し均等に貼り付けなければならない。クラフト紙を貼るための糊には米を練ったも

のを使用する。やはり稲作の盛んな大曲では、米を原料とする糊が豊富に存在したため、この点でも花火製造産業には有利に作用したのである。なお、貼付の際には紙・糊・力加減のバランスが非常に重要であり、ある程度の技術が必要である（写真6）。

6番目の工程はクラフト紙で糊付けした花火玉を乾燥させる工程である。方法は天日干しと乾燥機による場合の2通りある。なお、この段階での花火玉は外見がほぼ同じであるため、完成後は必ず名称を書き入れる（写真7）。

最後に大きさ別に仕分けされ、箱詰めされて出荷となる（写真8）。花火玉の大きさを箱の色によって区別するなど、細心の注意がみられる。

### (4) 花火の打ち上げ方法

完成した花火はコンピュータソフトを使用して打ち上げられる（写真9）。データを取り込むと音楽に合わせて花火が打ち上がるよう自動設定され、コンピュータから出る指示に従って花火をセットする。当日の打ち上げも自動のため、花火師は確実に花火が打ち上がるよう大会まで入念に点検を行う。また、観覧席までの距離と当日の風向を計算して、花火と音がシンクロして演出されるように花火の発射を0.03秒単位で切り替えることができる。

花火大会での打ち上げにはステンレス、鉄、紙、FRP（強化プラスチック）の4種類の筒が使用され、耐久性と重さの兼ね合いで使い分けられている。筒は内径7.6cm～121cmまでと玉の大小によって異なり、花火大会当日会場に設置される（写真10）。大曲の全国花火競技大会では約2000本の筒が使用された。雨天対策として、防水用紙と防水ビニールが花火に使用されているため多少の悪天候でも大会は実行できるが、やむを得ず大会が中止になってしまった場合、最低保証料が支給されるという。





写真2 火薬の配合作業  
(資料：前掲写真1)



写真6 クラフト紙の貼り付け作業  
(資料：前掲写真1)



写真3 火薬の造粒作業  
(資料：前掲写真1)



写真7 花火玉の天日干し  
(資料：前掲写真1)



写真4 火薬（星）の天日干し  
(資料：前掲写真1)



写真8 箱詰めされた花火玉  
(資料：前掲写真1)



写真5 玉込め作業  
(資料：前掲写真1)



写真9 花火打ち上げのコンピュータ画像  
(資料：前掲写真1)



写真10 花火打ち上げ用の筒  
(資料：前掲写真1)

する上で、家屋が密集する市街地中心部から一定の距離をおいた場所に立地する傾向にある。大仙市の花火製造業者も市内中心部より約3～6km程度郊外に分布している(図3)。

大仙市の花火製造業者は5社存在しているが、現社長は創業者から数えて4・5代目が5社中4社であるため、創業年も1800年代後半が4社と最も多い。創業以前は農家であった場合でも、創業以降は花火製造を専業として生計を立てている場合が多い。全社とも大仙市に本社を置いて経営し、いずれも隣接して製造工場を所有している。

従業員数をみると、家族が中心となって経営をしている従業者数5人の企業から幅広い年代層が

## V. 花火製造企業の特徴

花火工場は大量の火薬を扱うため、安全を確保

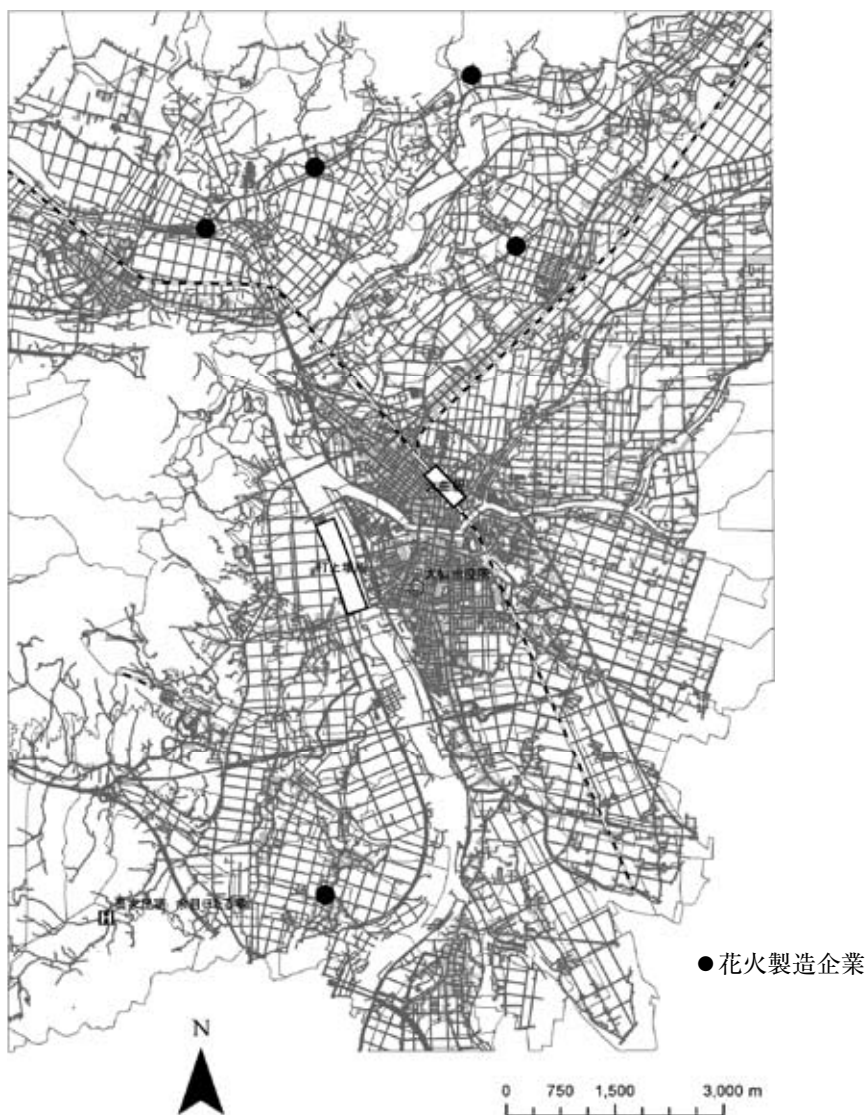


図3 秋田県大仙市における花火製造企業の分布  
(資料：現地調査より作成)



表2 花火製造企業の特性

1	世代	5代目	4代目	4代目	4代目	初代
2	創業年	1885年	1899年	1888年	1894年	2007年8月
3	市内他社との取引	なし	なし	なし	E社	D社
4	従業員数	23人	15人(男性8人女性7人)	12人(男性5人女性7人)	5人(正社員1人家族4人)	7人(男性4人女性3人)
5	打上協力従事者数	100人	不明	不明	60人	10人
6	後継者の有無	有り	有	有	無	有
7	業務内容	打上げ・製造	打上げ・製造	打上げ・製造	打上げ・製造	打上げ・製造
8	採用方法	募集なし	募集なし	募集なし	募集なし	ハローワーク
9	原料の仕入先	東京	東京・愛知	山口・埼玉・東京	市内他社から	東京
10	製造花火の出荷先	北海道から沖縄	東北地方から 関西地方	不明	東北地方から 中部地方	北海道から九州地方
11	花火大会参加状況	東北全域、全国各地へも	秋田隣接県、全国各地へも	東北全域	東北全域(年間20会場)	全国各地(年間30会場)
12	花火の製造割合	割物花火のみ	割物花火のみ	割物花火のみ	割物花火のみ	音物花火のみ
13	年間製造個数	約6万発	約4万発	1万発以上	数万発	約4万発
14	花火1個あたりの製造時間	3週間～4週間	3週間～4週間	3週間～6週間	3～4週間	3～4週間
15	花火製造の難易点	繰り返しの作業・「3K」の作業	失敗が後をひいてしまう	静電気への気遣い	努力の結果が出ないとき	繰り返して「3K」の作業
16	花火師の生き甲斐	観客の反応	観客の反応	観客の反応	観客の反応・打上げの成功	観客の反応
17	経営上の工夫	人気花火の研究	型物花火、音楽とのシンクロ演出	試し打ちを何度も行うこと	他社と共同で技術、アイデアを工夫	音物花火の専門工場である
18	重視すること	安全	忍耐力	安全	共存	安全
19	今後の課題と目標	技術革新・新しく魅力的な花火を観客に提供できるか	より余裕を持ち、何事にも自分からリードしていく姿勢をとること	事故が起こらないこと、無理せず花火工場の近隣に住む住民の安全を最優先すること	火薬を使用したテロなどが行われている中で同じ火薬を使用して世界中を幸せにすること	日本中の割物花火がよりいいものになること

資料：聞き取り調査により作成

23人従事する企業まで存在するが、比較的少人数であることがわかる。男女の割合はおおよそ半々で、男性は主に花火職人として製造工程を担当し、女性は主に主婦層がパートとしてクラフトペーパーの貼り付け作業をしている場合が多い。また花火大会当日には、打ち上げ従事者と称する普段は農業や民間企業に従事するいわゆる本業に就いている人達が協力する体制がとられている。当然、彼らは事前に研修を受け、各社の名簿に登録し、花火の打ち上げのサポートをしている。打ち上げ従事者は会社の規模によって人数が異なり、大会会場の各自治体におおよそ数十人単位で存在している。

さて、花火製造企業への入社希望者は少なからず存在するが、危険な薬品を取り扱うことから、信頼できる知人から紹介で採用する以外、特に募集をかけていないことが多い。花火製造業者は年間を通して花火製造を行い、繁忙期の7、8月には各地への販売や打ち上げを行っている。それに伴って、基本的に8時～17時頃である労働時間も、大会が重なる繁忙期には残業をすることが多い。

原料の仕入れ先は全社とも東京の企業を主流とし、その他にも愛知県や埼玉県の企業も対象にしている。商品の出荷先は会社の規模によって異なるものの、全国各地に配送されている一方で、従業員の移動を伴う花火大会での打ち上げは主に東北地方に集中している。

花火の製造工程には作業員が分業して製造する流れ作業と全員が日ごとに同じ作業を行う日割り作業があり、従業員数が多いほど分業されていることが多い。1つの花火玉が完成するまでに要する製造期間は3～4週間であるが、手の込んだものは3～4ヵ月かかる。

花火師のつらさは「きつい・汚い・危険」のいわゆる3Kとされ、日々単純作業の繰り返しや無事故が常に求められるため細心の注意を払わなければならない。花火師達はこのつらさを乗り越えて得られる花火大会での観客の反応や歓声に最高

の生き甲斐を感じるという。花火師達は自身の技に誇りと希望を抱きながら、それぞれ目標を掲げて花火製造に取り組んでいるのである。

## VI. おわりに

本稿では、著者の演習に所属して学ぶ9名の学生達が大仙市での地域調査を実施し、その結果をまとめたものである。同市最大のイベントである花火大会を支える花火師達に注目し、彼らの業務内容から花火大会への思いに至るまでを詳細に調査した。事前学習として花火産業や大仙市の花火製造企業の分布を調べ、企業訪問日時の調整、その調査項目といった内容の検討に時間を割いた。調査は市役所、商工会議所等への聞き取り、花火製造企業への聞き取りと工場見学を通して製造工程や花火産業の成立する要因、さらに大曲花火大会の歴史や仕組みについて理解を深めた。

大仙市の花火産業の歴史は古く、江戸期に伝えられた花火製造が、明治期に入って神社の奉納花火大会開催へと展開し、以降紆余曲折を経ながら大きな花火大会へと成長した。ヨーロッパでの花火大会の開催、NHKによる中継の開始等、知名度アップのさまざまな成長要因がある中で、全国花火競技大会の名称からもわかるとおり、花火師達の技術向上を目指す大会としての位置づけも大きい。単なる新作の披露にとどまらず、互いの知恵と技術を競い合う大会が最大の成長要因ではなかろうか。

大きな大会を支える地元の花火製造企業は花火製造と打ち上げを担当する小規模・零細企業であるが、長い歴史を代々受け継ぐ現社長のもと秋田県、東北地方、さらには東日本の多くの花火大会開催を担っている。一見3Kといわれる産業にあって、花火師達は花火大会を鑑賞する観客の歓声と感動を最大の励みとして日々の業務に勤しんでいるのである。さらに古くから水稲作の盛んな土地柄であるため花火製造過程に必要な籾殻と糊は、もち米で作るみじん粉を利用できたことなど、

花火製造業の成立要因にも恵まれた環境下にあったといえる。

### 謝辞

本論を作成するにあたり大曲商工会議所副会頭・賢木新悦氏, 大仙市役所・小山田雄弥氏, 加賀貢規氏, 小松英明氏, 高橋一華氏, 竹村宏之氏, 福原敬氏, (株)小松煙火工業・小松忠信氏, (株)北日本花火興業・今野義和氏, (株)響屋・齊藤健太郎氏, (株)和火屋・久米川正行氏, (有)大曲花火化学工業・新山良洋氏にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

### 注

- 1) 現地調査は2010年度地域構想学科3年の岩動ゼミに所属する桜田志織, 晴山潤一, 高橋和輝, 稲妻謙, 渋谷友里恵, 加藤悠人, 千葉加奈絵, 齋藤梢, 佐々木歩の9名で実施した。
- 2) 2012年3月現在の住民基本台帳による。
- 3) 花火製造企業への聞き取り調査による。秋田魁新報社(2010)によれば, これより早く仙北地域で打ち上げ花火が実施されたのは江戸末期といわれ, それを期に花火の製造技術が同地方に伝わったとされる。
- 4) 2010年の聞き取り調査時点での価格である。
- 5) 聞き取り調査による。

### 引用文献, Web)

- 関満博・足利亮太郎(2007):『村が地域ブランドになる時代』. 新評論.
- 関満博・遠山浩(2007):『職の地域ブランド戦略』. 新評論.
- 秋田魁新報社(2010):『大曲の花火』. 秋田魁新報社.
- 岩動ゼミナール学生(2011):『花火をテーマにしたまちづくり～秋田県大仙市を事例として～』. 東北学院大学地域構想学科岩動ゼミナール.